「教育県大分」創造に向けた地域別意見交換会 in 佐伯
開催概要［開催日：令和 6 年 9 月 26 日（木）］

［学校訪問］佐伯市立渡町台小学校
［訪 問 者］大分県教育委員会（山田教育長、教育委員、教育次長　他）
佐伯市教育委員会（宗岡教育長、教育委員、教育部長、学校教育課長　他）

1．概要説明

佐伯市立渡町台小学校は全校児童数 484 名で佐伯市では2番目に規模の大きい学校である。学校教育目標に「元気いっぱい夢いっぱい　みんなの学校　渡町台～学び、遊び、挑戦する　ふるさと大好きな子どもと教職員～」を掲げ、20 代の若手教員も多い中、若手教員をグリップし着実に学年経営を行える組織体制で教育活動に臨んでいる。

学校研究では生活科・総合的な学習の時間を中心とした「子どもが活動したくなる、表現したくなる単元構成と指導計画の工夫」を主題に研究を継続的に進め、若手教員もつけたい力を意識した単元を作れるようになってきた。

渡町台小　石井校長と地域児童生徒支援コーディネーターの宮崎教諭による説明

2．渡町台小における地域児童生徒支援コーディネーターの取組

〇「ひだまりルーム」（校内教育支援センター）支援

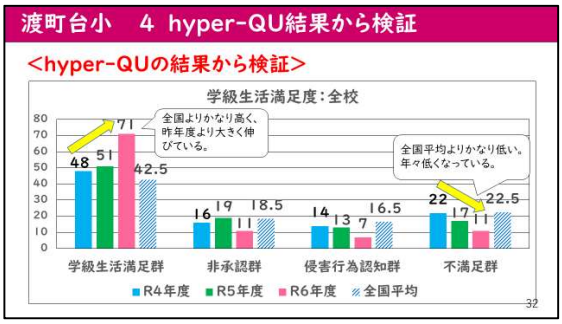
集団に入れない、または、不登校の児童に対して本人・保護者の合意の下で校長が通室を許可する。現在利用者は3人で、その日の予定は子どもたち自身が決めて、参加できる授業には参加する。

一緒に活動する中で、欠席が減り、行事にも参加できるようになった児童もいる。今後は長期的な目標を視野に入れ、「ひだまりルーム」と教室の格差を少なくしていきたい。

〇「とまちっ子タイム」（人間関係づくりプログラムを実施）

毎週1回15分間実施し、エクササイズは月ごとに変更している。エクササイズは年2回研修で教職員も体験する。

担任の負担軽減のため必要なものはコーディネーターが準備し、児童が視覚的にわかりやすい説明掲示を準備している。教職員には振り返りの大切さを意識してもらっている。



〇hyper-QU 結果からの検証

過去3年間の推移を見ると、学級生活満足群は年々増加し全国平均を上回り、非承認群や侵害行為認知群、不満足群は減少している。「とまちっ子タイム」等の取組の成果でもあると感じている。

2 年 1 組生活科「まちのお店たんけんに行こう！～まちの“すてき”を発見しよう～」

3．授業参観後の意見交換（主な意見）

・2年生活科の地域探検のように、自分の住む地域を知る学習は大切。
・違うところで学ぶ機会が持てるとか、学びが継続できるとか、何より先生が味方になってくれるという環境があることで、子どもは学校に行くことが怖くなくなると思う。
・枠にはめてはいけないということもあるので、そのような形だと心の拠り所ができるだろう。
・【校長】子どもたちにとって苦しい時に戻れる大事な空間として「ひだまりルーム」の取組を継続させていきたい。

［意見交換会テーマ］「芯の通った学校組織」を基盤とした教育水準の向上
～不登校の未然防止及び不登校支援に係る組織的取組の推進について～
［出　席　者］　学校訪問参加者及び学校関係者

1．佐伯市の取組説明

（1）佐伯市の不登校の現状と課題

【現状】コロナ禍の令和3年度の出現率 1,000 人あたり 27.4 人をピークに減少傾向で令和5年度は出現率 1000 人あたり 20.3 人。令和2年度の小5児童から「中1ギャップ」による不登校の増加がなくなった。

【課題】日常生活における児童生徒相互の関係の構築、行き渋りの見られる児童生徒への個別指導の在り方
不登校児童生徒の受け皿の確保、保護者との連携や保護者への支援の進め方

（2）課題解決に向けた取組について

①人間関係づくりプログラムの実施：エクササイズを OEN ドライブで共有
②校内教育支援センターの設置：市内7校に設置
③教育支援センター　教室「グリーンプラザ」の運営：現在 28 名が利用
④子どもの居場所づくり：放課後や休日の子どもの居場所づくり
⑤不登校を考える親の会：佐伯市教育委員会が主催
⑥改善のための実態把握：小中連携シートや年2回の hyper-QU 調査等
⑦コミュニケーション力と人間性を育成する表現教育
演劇的手法を取り入れたコミュニケーション能力・非認知能力の育成等

各小中学校の取組を説明

2．意見交換

（1）各小中学校の取組　※ルーム等は各学校の校内教育支援センター

①鶴岡小学校（児童数：536 名）
本年度から「さんさんルーム」を設置し児童生徒支援加配教員が主担当。SC、SSW、養護教諭の支援とも連動。現在 10 名が利用中で、保健室での支援と分担ができた。今後はルームへの授業配信を充実させたい。

②小中一貫校蒲江翔南学園（児童生徒数：小学校 149 名、中学校 95 名）
「翔南ルーム」で登校支援員が本人の希望に沿って支援。教育相談コーディネーターと連携して支援を強化。自分のペースでの学習や園芸、栽培、調理活動等で情緒の安定や教室復帰につながっている。

③鶴谷中学校（生徒数：480 名）
地域児童生徒支援コーディネーターを中心に「スマイルルーム」の運用と人間関係づくりプログラムの取組を推進。ルームの運用等の改善を進め、令和4年度から5年度にかけて新規の不登校生徒数減少。

④佐伯城南中学校（生徒数：329 名）
「ひだまりルーム」に登校支援員を配置し自分のペースで学習できる場を確保。登校支援員がチーム会議等に参加して情報共有し連携して支援。進級時に教室復帰できる生徒も3～4人いた。

（2）主な意見

・子どもが安心して学べる場の確保は大切（学校施設も含む）。
・佐伯市はいじめの認知件数が多い。先生方が丁寧に見取っているということだろう。そのことも不登校の減少に関連があるのではないかと感じた。
・保護者と教員の連携は大切。児童生徒とともに保護者の悩み等も聞いてあげてほしい。
・佐伯市の不登校減少の要因として、原因分析等の個人のアセスメントの丁寧さがあげられるだろう。
・非認知能力の育成は今後大切。学校、学級での生き物や草花の飼育なども有効。

3．意見交換を終えて

【市・宗岡教育長】

佐伯市が今後取り組んでいくのは表現教育と探究型の授業。表現教育については演劇的手法を取り入れた授業と市民と一緒に第九を歌う取組、探究型の授業は興味のあるテーマについての探究を教科の学習と関連付けていく形を模索する。2つを通して不登校減少、学力向上につなげたい。

【県・山田教育長】

佐伯市は不登校問題についても結果を出している。表現教育と探究型授業についてもモデルとなってほしい。市内には探究型の学習を進める高校もあるので、地域の高校の素晴らしさを小中学生や保護者に知らせたり、小中学校と高校が連携する取組も進めてほしい。

市・宗岡教育長　　県・山田教育長